

連作小説 1

プライベート・ドラゴン

村山由佳

生い立ちに消えない痛みを刻み、
離婚にも踏み切れないオリエ。彼
女は導かれるように不思議な図書
館の司書となる。そこは、彼ら
の湿った匂いに満ちていた――。

歩き始めてから、何かがおかしいことに気づいた。

井の頭公園の森ってこんなに深かっただろうか、とオリエは思った。吉祥寺の駅から商店街を抜け、坂を下りて橋を渡り、自然文化園の門をくぐり抜けてからもずいぶん歩いているのに、まだたどり着かない。

もう十年前も前、当時は恋人だった夫と訪れた時は、手をつないで少し散歩しただけですぐにまた繁華街に出たような記憶があるのだが、今日はどれだけ歩いて木々のトンネルが続いている。こんなはずではない、と思ったが、今さら引き返すことはできなかった。約束の時間にはすでにずいぶん遅れてしまっていた。

ようやく目指す建物にたどり着いた時には、コートの中がしっとり汗ばんでいた。

立ち止まり、オリエはそのおそろしく古い図書館を見上げた。石と木と鉄で造られた、中世の教会を思わせる建物だった。威風堂々としたファサード。スレート葺きの屋根はやや急勾配で、それがこの建物に独特の峻厳な趣を与えていた。

踏み面がすり減って凹んでしまった石段をのぼると、広めのポーチがあった。巨大なドアの前に立つ。てっぺんの尖ったアーチ型のドアは、二枚が中央で合わさる形になっていた。風雨にさらされ木目の浮き出た表面には錆びた鉄の鋌が並び、両脇の石柱の足もとを、それぞれグリフォンとドラゴンの石像が守っていた。

オリエは居ずまいを正した。姿勢の美しい彼女がさらに意識して背筋を伸ばすと、見えない糸で天から吊られているように全身がまっすぐになった。そのまま右手をのばし、ドアの横の呼び鈴を

押そうとした時だ。人差し指がボタンに触れるより先に、がたん、とドアが音をたて、軋みながら内側へ開いた。

隙間から、まず見えたのは灰色の服だった。チャコールグレーと、それよりも少し薄い色の毛糸が入り混じったケーブル模様のセーター。今どき縄編みのセーターなんて、と思いつつ目をあげたオリエに微笑みかけたのは、丸顔の人なつこそうな青年だった。

「こんばんは。お待ちしていました」

この人だ、とオリエは思った。ゆうべ電話で話したのは。

印象的な声だった。乾いていて、少しだけかすれた、質のいい干し草を連想させる声。だが、声と比べると男の外見にはまったくと言っていいほど特徴がなかった。一日じゅう向かい合って話をしている、別れたとたんに思いたせなくなるような種類の顔だった。

「遅くなって申し訳ありませんでした」

と、オリエは言った。それから、急いで付け加えた。

「初めまして。三鷹オリエと申します」

青年は笑みを少し大きくした。そんなに緊張しなくても大丈夫、といった感じの微笑だった。

「僕は、西荻といいます。この図書館の司書をしています。さ、どうぞ中へ」

彼が横へ一歩動き、オリエは思いきって足を踏み入れた。とろりと煮詰めたような空気は、湿った苔と羊皮紙の匂いがした。

背後でドアが閉まる。かちりと鍵が掛けられた。